

知的障害者である児童生徒に対する教育を行う 特別支援学校の各教科の考え方は何か。

知的障害とは

認知や言語などにかかわる知的能力や、他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇活動などについての適応能力が同年齢の児童生徒に求められるほどまでには至っておらず、特別な支援や配慮が必要な状態であり、その状態は、環境的・社会的条件で変わり得る可能性があるとしてされている。

知的障害の特別支援学校における指導の特徴とは

① 知的障害のある児童生徒の学習上の特性等

- 学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことが挙げられる。
- 実際的な生活経験が不足しがちであることから、実際的・具体的な内容の指導が必要であり、抽象的な内容の指導よりも効果的である。
- 知的障害が極めて重度である場合は、他の障害を併せ有することも多く、より一層のきめ細かな配慮が必要となる。
- 教材・教具や補助用具を含めた学習環境の効果的な設定をはじめとして、児童生徒へのかかわり方の一貫性や継続性の確保、周囲の理解などの環境条件も整え、児童生徒の学習活動への主体的な参加や経験の拡大を促していくことが大切である。

② 各教科等を合わせた指導

- 各教科、道徳、特別活動及び自立活動の一部又は全部を合わせて指導を行うことを「各教科等を合わせた指導」という。
- 知的障害のある児童生徒に対しては、各教科等を合わせて指導を行うことが効果的であり、従前から、「日常生活の指導」、「遊びの指導」、「生活単元学習」、「作業学習」などとして実践がされている。

ア 日常生活の指導

- 児童生徒の日常生活が充実し、高まるように日常生活の諸活動を適切に指導するものである。
- 生活科の内容だけではなく、広範囲に各教科等の内容が扱われる。

イ 遊びの指導

- 遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくものである。
- 生活科の内容をはじめ、各教科等にかかわる広範囲の内容が扱われる。

ウ 生活単元学習

- 児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際の・総合的に学習するものである。
- 広範囲に各教科等の内容が扱われる。

エ 作業学習

- 作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。
- 職業・家庭科の内容だけではなく、各教科等の広範囲の内容が扱われる。

③ 教科別の指導

- 教科ごとの時間を設けて、各教科等を合わせないで指導をすることを、「教科別の指導」という。
- 扱う内容については、一人一人の児童生徒の興味・関心、学習状況、生活経験等を十分考慮し、一人一人の実態に合わせて、個別的に選択・組織しなければならない。

④ 領域別の指導

- 道徳、特別活動及び自立活動の時間を設け、それらを合わせず、あるいは、それらと各教科とも合わせないで指導することを「領域別の指導」という。

ア 道徳

- 個々の興味・関心や生活に結び付いた具体的な題材を設定し、実際的な活動を取り入れたり、視聴覚機器を活用したりするなどの工夫を行い、道徳的実践力を身に付けるように指導することが大切である。

イ 特別活動

- 個々の実態、特に学習上の特性等を十分に考慮し、適切に創意工夫する必要がある。
- 各教科、道徳、自立活動及び総合的な学習の時間（小学部を除く）との関連を図るとともに、小・中学校の児童生徒等及び地域の人々と活動を共にする機会を設けるよう配慮することが大切である。

ウ 自立活動

- 全般的な知的発達や適応行動の状態に比較して、言語、運動、情緒、行動等の特定の分野に、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が知的障害に伴って見られる。そのような障害による困難の改善・克服を図るためには、自立活動の指導を効果的に行う必要がある。
- 自立活動の時間を設けて行う場合は、個々の知的障害の状態等を十分考慮し、個人あるいは小集団で指導を行うなど、効果的な指導を進めることが大切である。